JWF Water Journal 2015 年 4 月 17 日

第 7 回世界水フォーラム デイリー速報 Vol.4

APWF 執行審議会議長ラビ･ナラヤナン氏

Vol.4

1. アジア太平洋地域ファイナルセッション
2. 新たなプロセス 科学技術からのアプローチ

特集1、今日の“人”
特集2，今日の“言葉”

1、 アジア太平洋地域ファイナルセッション

アジア太平洋地域プロセスの最終セッションが 15 日、慶州･現代ホテルで行われました。3 日間にわたり繰り広げられた同地域の重点課題に関する 11 セッション（水と都市、水とグリーン成長、水と食料の安全保障、気候変動･水関連災害、統合水資源管理、農村部における水と衛生、中央アジア･アラル海の危機と環境の安全保障、北東アジア地域における越境河川の統合的生態系管理、激変する水文条件下での水循環、日中韓協力、カリブ海と太平洋の地域間協力）の成果をまとめるとともに、各セクターを代表する 10 人の登壇者によるハイレベルパネルが行われました。パネルでは、優先行動と具体のコミットメントに焦点を当てた議論が展開され、地域としての今後の行動戦略の基礎となる諸条件、課題解決を阻む障壁、進展を促すための推進力としてのアジア･太平洋水フォーラム（APWF）への期待、指標の重要性が整理･共有されました。

◆政策課題としての水 ―期待される法整備と資金投入

全世界の気候変動とともに、世界において最速度で進行するアジア太平洋地域の都市化と人口増加は、あらゆる水問題を顕在化させます。技術･知見の進歩、共有は進んでいますが、それを現実に組み込み･展開していくには、国や地方政府の政治的意思、法制度、資金がなければ課題は解決で

きません。取りまとめでは、これを実現するための政策決定権者への働きかけが一層重要であるとの認識を共有すると共に、ローカルレベルでの現実とそこから発せられる声にしっかりと耳を傾け、両者を繋げていくことが重要であることが確認されました。同地域が積み重ねてきた努力を、課題解決を促すより強い力として糾合していこう、課題は入り組み・複雑ではあるけれども、一つ一つ着実に解決していこうというチームとしての強い意思と結束が示されました。

これらの課題認識は、開発途上国だけでなく日本にも共通するものです。ビジネスや政治家の票につながらない水問題が、政策課題に挙がらない状況は世界共通です。各国・各地域で異なる課題を、いかに政治的意思に取り入れ、法制度の実現と資金投入の促進を図るかが、水に関わるすべての関係者の行動として重要になります。セッションの席上、同地域プロセスのコーディネーターであるは、課題解決の推進力となる重要な機会として、2017 年の開催が予定されている第 3 回アジア太平洋水サミットについて言及しました、同サミットは、第 1 回は 2007 年に日本・別府、第 2 回は 2013 年にタイ・チェンマイで開かれています。

なお、このセッションの映像は、第 7 回世界水フォーラム公式サイトからご覧頂けます。

2、新たなプロセス　科学技術からのアプローチ

「テーマ」「政治」「地域」に加え、今回から新設された「科学技術」プロセスでは、国際機関や学識者、企業などが連日、水問題解決に向けた科学技術的なアプローチについて議論しています。

15 日に開かれたセッション「洪水予測の改善による都市部における被害軽減」には、韓国水資源学会、中央大学の山田正教授、韓国洪水統制所・河川情報センター、オランダの研究機関 Deltares、国立台湾大学、スペインの公共企業 Tragsa、テキサス A&M 大学が参加。韓国建設技術研究院をコーディネーターに、それぞれが先進的なリスクアセスメントやレーダーの活用策、雨水の統合的管理手法、降雨予測の不確実性を考慮した意思決定や計画設計などが発表されました。

科学技術プロセスでは、こうした気候変動対応や災害対策のほかにも、水の有効利用促進におけるスマート管理や省エネルギー化など、最新情報の共有が進められています。

UNESCO などが 15 日に開催した科学技術プロセス「水と廃水システムのエネルギー回収と効率」では、下水処理システムの省エネ化とエネルギー回収に関する技術について議論を展開しました。約 80 人が参加した同プロセスでは、汚水から直接エネルギーを回収する手法や藻類バイオマス、微生物電池などアメリカや欧州など先進国を中心に研究や導入が進む最新の事例が紹介されるなど、下水道のポテンシャルの高さに注目が集まりました。

今日の人

水ing 代表取締役社長 水谷 重夫氏

アジア太平洋地域プロセスのファイナルセッションでのハイレベルパネルに、同地域の民間企業を代表して参加。「日本の強みは、数多くの災害を乗り越えた教訓を形にして、より強靭なインフラを構築してきた実績、そして技術力と信頼です」と発言しました。フロアからの汚泥利用に関する質問に対しては、食・エネルギーに貢献する日本の技術力を発信。アジア、そして世界をフィールドに事業を展開してきた経験から、日本が世界の水問題を主導していく大切さを訴えました。

東レ フェロー 栗原 優氏

数々の学術会議に出席し、世界を舞台に多くの研究を発表してきた中で、これまでの世界水フォーラムは「研究者や民間企業が積極的に参加する場とは言いがたかった」そうです。しかし今回は、科学技術プロセスが新設され、氏が参加した『水の再利用と回収における高度技術とイノベーション』セッションにも、優れたモデレーターとベテランのパネリストが集結。議論を振り返り、実りある内容だったと語りました。

今日の言葉

日本水フォーラム マネージャー
戸野原　芳恵

「世界の水問題の第一線で働く人とともに働くことが、私を成長させてくれました。森喜朗会長や今回のアジア太平洋セッションで議長を務めてくださったラビ・ナラヤナンさんの言葉の一つ一つに『なぜああ言ったのだろう』という気づきがあります。世界に貢献する、世界を変えるという大きなチャレンジにチームみんなで頑張れることが日本水フォーラムの仕事の楽しさです」。

発行：特定非営利活動法人 日本水フォーラム
〒103-0015　東京都中央区日本橋箱崎町 5-4 アライズ第２ビル６階　URL: http://www.waterforum.jp
取材協力：日本水道新聞社　東京都千代田区九段南４丁目８番９号 日本水道会館１F　URL：http://www.suido-gesuido.co.jp
※この速報は、日本の皆様に、世界水フォーラムの議論の内容や、日本の関係者の皆様の活動をお伝えするために、日本水フォーラムがとりまとめているものです。
内容は、速報暫定版のため後日修正されることがあります。発行予定は予告なく変更することがあります。